

談話

第一週

ジャックミ豆の木

有名なイギリス童話で、これをもミミしたいろいろの話が、大分作られてゐる。本格に選ばれてゐるこの筋なり人物なりは一度是非きかせておきたい。

第二週

火打箱

想像力の豊かなアンデルセンの作のこま故、縦横無盡に筋が展開してゆくの、本筋をそのまゝでは餘り複雑で話されない。いくらか省略した點もある。作者に對して、禮を缺く事になるかも知れないが、折角のこの面白い話を、その爲にやめるのも、残念である。この年齢に了解出来る程度に話をして、よい話といふものゝ永遠性を少しづつでも濃くしてゆくのは、私達の任務でもあるような氣がする。

第三週

月の話

この週は時話が多い。十五夜のお月見から話は始るわけであるが、二三日前から誘導の方で、供へ物の品々を作るので、豫備觀念が出来てゐる。

もうこの頃になれば、月そのものゝ話もしておくべきである。太陽、地球などの天體さしての中では、三日月から満月へミ形の變る月は最も話しよい材料でもある。晴れた夜の大空に、まん圓なお月様を仰ぎ見る約束などもする。

秋季皇靈祭

年少組では民間の彼岸の話をしたのであるが、(春季皇靈祭は、いつも休暇中であるから)秋季には、宮中で祭祀を行はせられる事を話しておく。その爲の休みである事も知らせておく。

東京市の話

今迄に初めて出て來た地理的要素を含む話である。自分達の住む土地さして、各兒の住所ミ關聯し、或は、

京都、大阪、等の地名をきり出して説明するものいゝ。

月の兎

相馬御風氏の作、「良寛さま」の中の一文である。月と兎

観 察

第一週

こほろぎ、ばったこそれ等の巢

(年少組の記事参照)年少組に於てはまだ巢いふ處まで観察するまでにならない。が年長組にもなれば當然の様に子供の方から巢いふこゝを考へてそれをたづねようとする。さうしたら一緒にさがさう。その時、こんなものに興味をもつ機會の少い女兒をも必ず共にし度いものである。こほろぎも、ばったもその巢を草の間、物の蔭なぎに土に穴をあけて營む。拇指大のそんなに深くない穴である。草の間が靜な時巢の外に出て陶然として翅をこすつて鳴いてゐる事がわかる。

蟬

の話はいろくあるが、かういふ權威ある作者の話をお聴かせる方がいゝと思つて選んだ。

夏の景物蟬を観察させるにはさうしても九月になつてからになる。都會の幼稚園では捕へるのに一苦勞であらう。私達の幼稚園では鈴懸にも櫻にもよく來て鳴いてゐる。子供達がつかまへる。さうしたらさつきの鳴聲を外觀を結びつけて観察させる。みんく蟬かつくくばうしとか、ひぐらし蟬とか油蟬とか知つてゐる蟬の名を言はせ鳴聲について話し合ふ。夏の早い頃に、又今の頃でも蟬のぬけ殻を見付けたらとてもよい觀察の機會となる。蟬のぬけ殻を観察させる事は時刻的に時間的に不可能だから話と共にせめてよい繪又は寫眞の記録なきをみせるこゝい。ぢむし—さなぎ—蟬への變態を通していつもの知りたいたい心はむくむく成長してゆく。